

# 人は学び、努力することはできる

上 廣 榮 治  
うえ ひろ せい じ

八月の初めの同じ日に、二つの処断が下されてマスコミを賑わせました。そしてそのどちらに対しても、「遅きに失した」という意見が少なからずありました。一つは政治と金の問題で指弾されていた農水大臣の辞任で、もう一つは大相撲の横綱の謹慎処分です。

前者は、十八人の閣僚のうち六人、実に三分の一が失言や不明朗な会計の問題で糾弾され、その逆風の下で行なわれた選挙で、与党が歴史的な大敗を喫したあとの更迭でした。

また後者は、かねてから数々の問題を指摘され、ヒール（悪役）とまでいわれながら、これまで放置されてきた挙げ句の処分でした。

たしかに、どちらも「遅きに失した」といわれても仕方がないかもしれませんが。六名の閣僚については、なぜ庇わなければならなかったのか。かの農水大臣もさっさと処分しておけば、選挙での大敗はなかったであろうという意見が、選挙後、与党内から噴出しました。また、横綱についても、もともと品格に欠けていたのだから、強いというだけで横綱に推挙すべきではなかったとか、過去に問題を起こしたときに、果断に対処すべきだったという意見が、謹慎処分のあとに相次ぎました。そうすれば、今のような大相撲の人気の低

迷もなかったはずだというのです。

しかし、こうしたあとからの批判はジャンケンの後出しのようで、どこか釈然としないものがあります。それならばなぜ、遅きに失しないうちに、そうした意見を表明しなかったのでしょうか。

おそらく、問題の閣僚たちも横綱も遵守すべき法律や規則、あるいは当世の風潮に照らす限りでは、問題にはならなかったからでしょう。

閣僚の失言は、「言論の自由」という建前からすれば、何の問題もないことになります。不明朗な会計も、政府の説明によれば「法令の範囲内で対応していたから問題ない」ということになります。

また、品格に欠けるとみられていた力士が横綱になったのも、大関で連続二回優勝、またはそれに準ずる成績という相撲協会の内規に従って推挙されたのです。礼を失した行為も、それが「個性」だから仕方がないということになります。巡業の不参加も診断書さえ提出すれば認められていたのです。

どちらも、法律や規則に照らして問題はない。あとは「個人の自由」だ、「個性」だと強弁されれば何も言えないのが、当節の風潮です。だから、遅きに失する前には意見が出なかったのでしょうか。

では、それなのになぜ、遅きに失したとはいえ、彼らは処断を受けなければならなかったのでしょうか。皆さんには、ぜひこの点にご注目をいただきたいと思います。

彼らは少なくとも法律や規則の範囲内では許されていました。しかし、それよりもっと大きな問題、「自分の小さな善を、より大きな善に優先させた」こと、すなわち「倫理に悖っていた」ことを、もはや世間が許さなくなっていたから、処断されたのです。昨今の目に余るモラルハザード（倫理的危機）が社会を壊しつつあることに、多くの人が危機感をつのらせ始めたのです。

そもそも国会議員とは、何のために選出された人でしょうか。社会をより善くするために選ばれた人であ

るはずで。とすれば、彼が主張して許されるのは、社会をより善くできる方策でしかありません。

社会をより善くするには、さまざまな方策がありそうですが、実はただ一つの方策しかないのだと、私は思います。

一地域に利益を誘導する善よりも、社会全体に利益をもたらす善、さらに、人類全体に合わせをもたらす善こそが、優先されるべき方策なのです。より優先されるべき大きな善を選び取って主張し、実行できる人。そうした人だけが国会議員としての資格を得ることができると、私は思います。

放言閣僚とは、より大きな善に照らすことを知らず、「自分が言いたいこと」や「目先の利得に結びつくこと」を口にしてはばからない人のことです。事の善し悪しが判断できない人だからこそ、糾弾されると、たちまちごまかし、言い逃れをして、自分の地位の保全を図り始めるのです。

もし、大いなる善に照らして、正しいと確信している意見であるなら、どんな批難や攻撃を受けたとしても、言い訳したり謝ったりする必要などないはずで。自らに恥じるところがないならば、千万人といえども吾往<sup>われゆ</sup>かんの信念を持つてはいます。

もしも、社会がその善き意見を受け入れることができないほど昏迷<sup>こんめい</sup>の内にあるならば、もういちど原点に戻って、一人ひとりの倫理力を掘り起こすことから始めればよいのです。政治的信念とは、そうしたものなのではないでしょうか。

「たかがカネ」の問題を、法にすれすれのところにおいていた閣僚の陋劣<sup>ろうれつ</sup>さについては、もはや説明の必要もないでしょう。それこそ、自分のためだけの極小善を優先させて、党利という小さな善にすら迷惑をかけたのです。そしてそれ以上に、政治的混乱を引き起こして、大きな善を討議する場である国会を、スキャンダル暴露という陋劣<sup>ろうれつ</sup>な場に貶<sup>おとし</sup>めたという点で、社会全体に大きな迷惑をかけたのです。

また、謹慎処分を受けた横綱は「自分がしたいこと」のために、多くの相撲ファンの楽しみを潰えさせました。彼には強さはあっても、心技体という、より大きな善が欠けていたのです。

そして両者とも、法や規則の範囲内なら、倫理に悖ることをしても許されるのだという通念を社会にはびこらせたという点で、その罪ははなはだ大きいと言わざるを得ないのです。

さて、皆さんの中に、そんなことは自分とは無関係だ、と言い切れる人がいるでしょうか。ときとして自分の思いや言いたいことをほしのままにはしていないでしょうか。日々時々の言動において、最高善を念頭に、より大きな善を目指して、常に実践を続けています、と断言できる人がいるでしょうか。

私も含めて、たとえ我が会友であっても、常に言動をより善く貫き切ることは、はなはだ難しいことだと思います。人間とは、ある意味では、まことに不完全な生物であるからです。

しかし、私たちは学ぶことができます。法や規則に触れなければいいのだと、倫理に悖る言動に無神経になつていると、必ずしつぺ返しを受けるといふことも、この事例から学ぶことができます。

私たちは学び、努力することができます。不徳を排し、より善く生きよう。小さな善に、より大きな善を優先させようと努めることができます。

私たちはいまだ、常に最高善と共にあることはできません。しかし、そう「心がける」ことはできるので、より善い明日に向かって、たゆまず努力することができますのです。

より善い明日に向かって努力し続けること。今を生きる喜びは、そこにこそあるのだと思うのです。

